十六世紀から十七世紀迄のイエズス会の日本の仏陀観

Frédéric GIRARD
Directeur d'etudes, École Française d'Extrême-Orient

まず、ジェームズ・バスキンド先生にお礼を申し上げたいのであります。わざわざ今回の学会へ招待してくれて誠にありがとうございます。

本論に入る前に１つ指摘したいことがあります。それは私の発表の題に関して、誤解を招き易い翻訳の問題から来ることですが、もともとフランス語で、Buddha Jésuitesと言い出しているというのは、イエズス会の神父様達が見た仏陀のことであります。というのは、イエズス会の宣教師にとって異端の宗教たる仏教で崇拝している仏陀をどのように書簡や報告書の中で表現していたのか、又、ヨーロッパの国々へどのように伝えていたのかという問題であります。勿論、異端者たる仏教のことを述べた時に客観的に見ていたとは考えられません。多々、曲解して伝えていたと考えられますので宣教師達の言っていることは資料として当てにならないと考えがちなのかもしれませんが、必ずしもそうではなく、実は現実を的確に捉えている部分もあることを指摘したいと思っております。それは特に阿弥陀信仰に関するところであります。又、ここで扱っている資料は主として16から17世紀の終わりごろまでであることも前置きしておきます。

全体的なことを言えば、今、研究しているのは、例えば、外来思想、外来のものが日本に来て、どういうふうに受容され、受け入れられて、どのように日本人が反応しているかということを研究することにより、日本の宗教や思想がもっとはっきりわかると思っていますので、今のところ、鎌倉時代や江戸初期を特に注目しており、一貫性のある研究を目指しています。フランスでアナール学派の代表者たるジャック・ル・ゴフ教授の講義をかなり長く聞き、そのゼミナールに参加して得たメソッドから、日本の歴史を長期的に見ることによって理解を広げ、深めることに興味を持っていますし、そういうような研究の手法を実行しています。狭い意味での専門から外れていることにあまりびっくりしないでくださいますようにお願い申し上げます。

自分の研究で中世の末と江戸時代の初期に手を入れかけたときに、１つ気がついたことは、キリシタンの時代には、日本側では仏教の僧侶たちは仏教の復興運動を起こしたことです。例えば鈴木正三（すずきしょうさん，1579-1655）とか雪窗宗崔（せっそうそうさい，1589-1649）という17世紀の前半の人たちが書いたものを読んでみれば、一応２人とも禅宗の僧であるといっており、鈴木正三は、一応、曹洞宗に属していると自分でも名乗っていますが、道元

(1200-1253)の思想とは場合によって、かなり逆のことを言っています。例えば、「自己を忘れる」という有名な道元の言い回しの代わりに、「自己を堅く守ろう」とか、そういう言い回しを流行させましたし、また『仁王禅』という密教の匂いが強くする動的な禅の方法も行いますし、また念仏を禅の中に取り入れます。即ち、鈴木正三の場合、当時の明時代の外来仏教が、禅と念仏を一緒にしていたことに基づいていただけのことではないと思われます。むしろ政治的な理由がもともとあったのではないかと憶測されます。ただし、彼の半弟子、半堂僧の雪窗の場合には、事情が違います。鈴木正三は三河の人で、雪窗は九州の人です。雪窗は、やはり黄檗宗や全真教という習合宗教の影響をかなり受けていることから、彼の仏教復興運動というのは、三教一致に基づく見方です。また仏教の教理と修行の汎論の性格を帯びている『大乗起信論』をもとにしたというのは、『大乗起信論』は時代によって、例えば奈良時代や鎌倉時代、江戸初期と明治時代(原坦山が東京大学で東洋哲学の講義を開いた折から)には、仏教の宗派に共通な教義を求めれば、『大乗起信論』が受け入れやすく考えられていたのではないかと思います。

まず、イエズス会側の理解によれば、仏教、日本宗教をどのように描写されているのかを見るのに、一番いいものとして、「山口討論」(1552)というコスメ・デ・トルレース(Cosme de Torres, 1510-1570)というスペイン人のイエズス会の宣教師と日本人のお坊さん達との間の論争が残っています。それを見ますと、キリシタンと日本の僧侶たちの論争の中で、本当にお互いに、まだ相手の宗教的な主張などを知らないで、率直にそれを発見し、何に関心があったかが見られます。本当の質問があって、本当の答えがあったと思われますので私がそれを重視している理由です。

「山口討論」以降になりますと、宗論の大部分は、お互いに頭の中に政治的な配慮が入ってきて、自発性がなくなり、思想的にはつまらなくなると思いますが、「山口討論」のときに、コスメ・デ・トルレースが書いていることは、宗派として日本にはまず釈迦を本尊にして、法華宗があると。その次に、阿弥陀を本尊とした信仰があるというのです。それは別に浄土宗とは言わないで、阿弥陀信仰みたいなものと言っています。その次に、日月、お日様とお月様を崇拝している信仰と、それから禅宗があるという、そういう分類を行っていますが、法華宗の場合には、釈迦はただの人間であることを重視しています。阿弥陀信仰の場合には、流れは２つありまして、阿弥陀信仰しか崇拝しない人たちは、一向宗で、それでもう１種類は、何の名前も言っていないのでありますけれども、明らかに法然を創始者としている浄土宗と推測できます。禅宗の場合には、また２種類があって、何でも全部拒否している宗派と、それで霊魂は不滅だという宗派と２つ区別しているのであります。そういう日本宗教の一番

初めの分析は、その後の時代の宣教師のものを読んでも、雪窗の時代までは、ほとんど動いていないことがみられます。

日本の宗教を非常によくまとめて述べ、ヨーロッパでよく読まれたのはアタテナシウス・キルヒャー(Athanasius Kircher)というドイツ人のイエズス会の神父で、彼は1601年に生まれて、1680年に亡くなっています。彼は博学者で、数学や自然物理学など多くの言語も知っていました。今、この問題にしていることの背景として、彼の時代には、少しずついろんな宗教、特にエジプトとギリシャとラテンの宗教の習合宗教に関心があった時代で、すべての宗教はエジプトから来ているという考え方が流布していました。彼はそういう方向で、自分の思索、世界中の宗教に関するイエズス会の宣教師の通信を読み、体系的に自分の分析を時代の考え方にあわせました。

エジプトが宗教学の中心であるという当時の流れの例を挙げれば、1525年にイシス信仰熱の中で、イタリアのトリノでイシスの銅盤が発見されましたが、これは明らかな偽作でした。

また、ピエロ・ファレリアノウ (Piero Valeriano)という16世紀の学者は、ヒエログリフに関心を持ち、*Hieroglyphica*を1556年に出版しました。

キルヒャーはイシスの銅盤というのは、新プラトン派的な解釈に基づいてイシスという本尊のもとに、エジプトの神々をエジプトの宗教、ギリシャの宗教、キリスト教、ヨーロッパの現地宗教を総合的に、体系的に描いて分析した銅盤でありますが彼の解釈はその後、ヨーロッパでは支配的な解釈になってきたことは注目に値します。

キルヒャーは次の３点を元にして体系を創ります。

１）イシス信仰イシスには、キリスト教では聖マリアが当たるとか、あるいはギリシャ、ローマ神話ではそのイシスがアテナかアルテミスかデメテルに当たるとかいうような考え方から、宗教上の人物がエジプト、ギリシャ、ローマ、現地宗教、キリスト教という宗教でどういうふうに同一視されているかという点

２）表象の使用、例えばヘルメースという神には錫杖があるという点

３）文字、仏教の密教の種字に近く、ヒエログリフが特定の神に当てられる点

そういう３つのことが１つの神に並べられているのであります。その考え方に基づいて、彼は全世界の宗教に、そのイシスの銅盤を考えようとしました。それですべての宗教はエジプトから来ていると主張しまして、日本の宗教に関しては、『エジプトのエディプス』(*Oedipus Aegyptiacus*)といって1652年に書いた大きな書物の中で、そういう体系的な宗教学を考えようとしたのであります。

その本の中で、例えば、阿弥陀というのは、ホリュス(Horus)に当たる神で、あるいはそのホリュスというのは、別な神の名前でも知られているのですが、ハルポクラート(Harpocrate)という神に当たるとも言います。そしてまた日本の宗教を描写して、まずは日本の宗教というのは、中国から来ていると。ですから地域的には、日本の宗教は中国から輸入されたものですけども、中国から来たものがインドから来ていて、インドから来たものがエジプトから来ていると。そうすれば、日本に見られるものが必ずエジプトに、それに当たる神があるはずだという、非常に明解な、本当の宗教学を始めた人と思われます。そして中国と日本で使われている漢字というのも、もちろんエジプトのヒエログリフに当たるもので、習字みたいなものだったと思いこんでいたらしいのです。

日本の宗教を分析しているときに、まずは禅宗があって、それで禅宗の中に、霊魂が不滅であることを認めない宗派があると言います。それがエピクロス派だというふうに見ているのであります。彼の描写は本当に少し、いろいろ混同しているのですが、禅宗の中に神を崇拝しているとも言うんですけれども、それはどういうことなのかわかりません。2番目の宗派は、阿弥陀信仰で分析し、それがピタゴラス派に当たると言うのです。そして、3番目は、また法華宗という宗派であって、これは明らかに天台宗ではなくて、ここでは日蓮宗のことを言っておりまして、それでその法華宗の中に弘法大師も入れていますので、明らかに間違いですが、弘法大師と修験道を一緒にしていて、非常に残酷な宗教というふうに定義し、僧兵でもあるし、いけにえを行っている人物たちだと言うのです。それで阿弥陀のことを言っているうちに、阿弥陀は女性と男性の両方があるといいつつ、主として女性として扱っていると言うのです。

今、例としてここに、図で一番初めに3つの阿弥陀の例を挙げているのをご覧に入れます。やはりハルポクラートというオフィスに混同されています。私がここで載せたのが、マドリードの近くの王家の離宮のエル・エスコリアールの図書館でとったもので、非常にきれいだと思って、一番きれいなものとして載せましたが、一番初めのもの(図1)は、やはり阿弥陀で、当時、太陽の神とされていまして、それで蓮の上に座っていて、それを祈る信者が下に描かれています。おそらくよくわかりませんけれども、阿弥陀の極楽は南海というふうに位置づけられたので、海の中にロータスが出るというのを描いたのではないかと思います。2番目(図2)は、おそらく阿弥陀と、阿弥陀の信者を混同して描いたのではないかと思いますが、また着物は少し特殊で、半分日本の美濃風、半分中国風ですが、何だかよくわかりません。バスキンドさんはモンゴル人のような格好をした阿弥陀ではないかと言っていますが、それに、阿弥陀にはブフィギャーという神様とも混同されていて(図3)、100の手を持っているというふうに。100でも、10でも、6つでも、4つでもというように、数字はどち

らでも構わないと言っています。そして３番目には、このような格好の阿弥陀仏が出てくるのです。

このような宗教の見方は、ちょうど雪窗の1648年に書いた『對治邪宗論』というキリシタンを論破した書物の中にある宗派の分類がちょうどぴったり合いまして、おそらく雪窗は江戸城でイエズス会の通信の翻訳を見て、自分のキリシタンの論破したものを書いたのではないかとは思われますが、彼の書物の中に、やはり『大乗起信論』の術語とか全真教の言葉の術語がたくさん出ていますし、霊魂不滅論の説もかなり出ているのです。徳川、特に家綱の時代に、徳川家の中に1651年かの『松平開運録』とか、17世紀半ば頃の『東照宮御遺訓』という書物の中に、どうして徳川家が政権をとれたかというと、徳川家康の顧問だった存応という浄土宗のお坊さんが、権力というのは阿弥陀如来の剣をもらうと得られる、徳川家の政権はそれであるという説明が出てくるんです。それで、その文献は、大桑斉先生が最近活字にしてくれましたので、それを細かく見れば17世紀の宗教史がかなり解り、我々の徳川時代の宗教史がかなり変わってくるのではないかと思います。

やはり徳川家は浄土宗を本宗派としていまして、鈴木正三のような人物が天草へ行く前に、まず江戸城へ行くのであります。ですから江戸城へ行ってからやはり、浄土の教えを自分の説法の中に入れなければいけないというふうにしたに違いありません。ですから、その徳川家の文献と正三の言っていることは、完全に一致するのが当たり前のことです。一例だけ取り上げますが、町人がちゃんと町人の仕事をすれば、それで菩薩行か仏行になり、来世に往生できると徳川家の家訓的な文献では言っていますし、鈴木正三も自分の書物や説法の中でそれを言っているのです。ですから、それはどう考えても大陸からの影響だけでは説明できないと思います。それで来世のことを仏教側で主張するようになったのも、キリシタンに対しての反応ではないかという仮説を私は立てようと思っています。

例として渡したＡに関しては、私は特別に詳しい研究をしたわけではないのですが、ただ言いたいのは、図の第２とか第３にあるものを見れば、みんなヨーロッパで作られた図像で、例えば阿弥陀は太陽の神とか或いは永遠の仏だとかに描かれています。

図の第２の例には、アラン・マンソン・マレー (Allain Manesson Mallet, *Description de l'univers (de 1683) contenant les différents systèmes du monde, les Cartes générales et particulières de la Géographie ancienne et Moderne : les plans et les profils des principales villes et des autres lieux plus considérables de la terre ; avec les Portraits des Souverains qui y commandent, leurs Blasons, titres et Livrées : et les Moeurs, religions, Gouvernemens et divers habillemens de chaque*

Nation, dédiée au Roy. Tome quatrième, Paris, chez Denys Thierry, rue Saint Jacques)の1683年のもので、それが都、京都の大仏とされていて、明らかに三十三間堂であります。ですから三十三間堂の方広寺には２人の力士とか狛犬がありますので、同じ物を描くように注文を受けたヨーロッパの絵師には理解できなかったものと思われる例です。明らかに観音と阿弥陀が混同されていて、そして両方とも女性というふうに述べられていることが言いたかったのであります。当時は、浄土宗は国家宗教でありましたので、イエズス会側からもそういう阿弥陀仏ばかりを見ていたというのには、理由があると言いたかっただけであります。

論議や論争や宗論に関しては、あまり面白くないと申しましたのは、一番初めに読んだときに、おもしろいのとつまらないのとがあったという私の最初の印象であって、例えば崇伝の書はただの禁書で非常につまらないのでありますけれども、細かく分析すると、歴史的事象が見え、非常に興味深いことを言っています。崇伝の批判の一番初めに来るのは、キリシタンが日本の神々を無視していることだと指摘しています。そして、禅の僧である崇伝でも、一番初めに問題にしているのは神々であり、神国であります。その論法はやはり細かく分析すべきでしょう。

林羅山の場合には、論争相手、フカンファビアンに対し、どうしてもキリスト教の神の上に儒教の理を置かなければなりませんでした。それで彼は無理に朱子学の理を絶対者にせざるを得なくり、無極の極と同一するようになり、日本の朱子学の性格が大きく変わるようになります。

正三と雪窗の書いたものが、初めにつまらなく思ったのが、前の宗論の繰り返しばかりを書くので、70%ぐらいは前に書いたものの丸写しですが、ただし興味深いのが、繰り返しではないところ、あるいはつけ加えたところにあります。正三の場合には、やはり念仏のところは政治的な配慮が入っていますが、雪窗の場合には、大陸の黄檗宗の影響がありましたので、半分政治的な配慮もあれば、半分は自然にそのように思っていたと考えられます。ですから細かく分析すれば、色々な違いが出てくるのは興味深いことです。

図１ Amida-Kannon sur son Lotus

図２ Amida-orant Assis

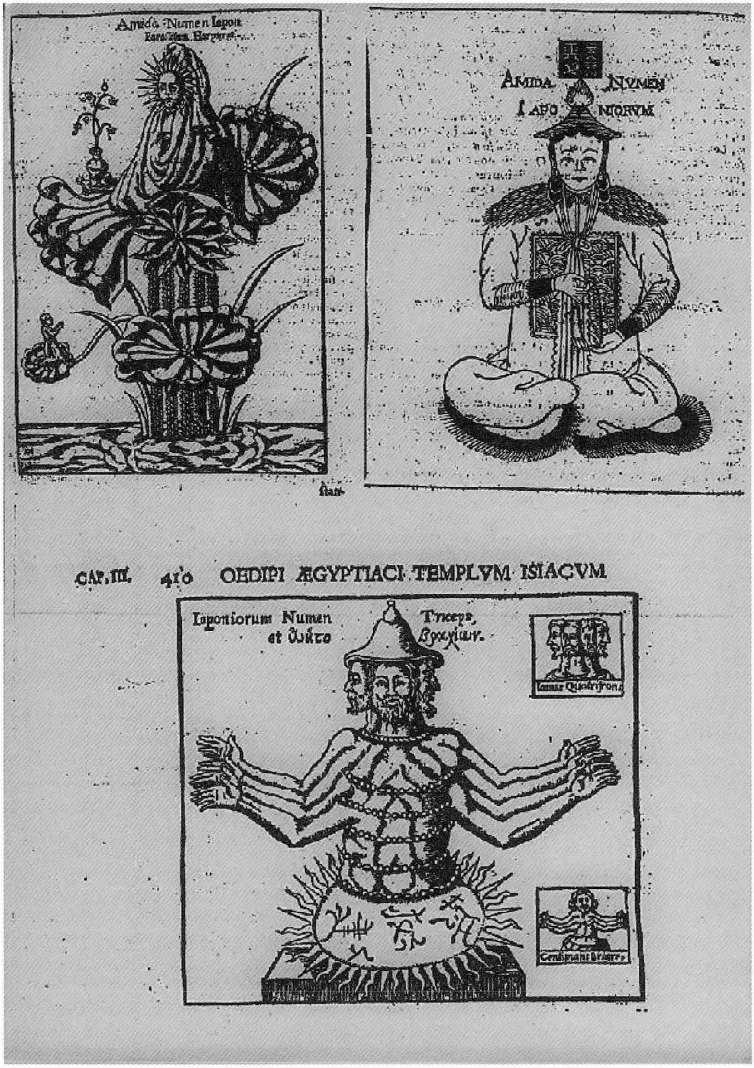

図３ Triceps-Briare-Amida

（全図 *Oedipus Aegyptiacus*, 1652 より）